

「主イエスに従う道」

みなさん、おはようございます。約1ヶ月半に渡る緊急事態宣言もようやく今日で解除という事で、先ずこの間の主のお守りとお支えに感謝したいと思います。また、過酷な医療現場において人々の命を支え続けておられる医師や看護師の皆さんにも感謝の思いを言い表したいと思います。他方、春の到来と共に気の緩みがちな時期にあって、ここまで減少した数が再びバウンドすることのないように、私たち一人一人が引き続き予防対策を講じながら新年度に向けての歩みを進めてゆければと願っています。また、ワクチンの接種がさらに幅広く浸透・拡大し、私たちの日常生活にさらなる安心感がもたらされますように心から願います。

さて、今月の14日(日)よりマルコに福音書に入りましたが、本日の1章前半部分では、先駆者であるバプテスマのヨハネの登場と主イエスの受洗に続く場面となります。聖霊が鳩のごとく天から降り、「あなたはわたしの愛する子」(11節)との天の御父の宣言を受けた主イエスが、同じ御霊によって荒野へと導かれるシーンであります。先週21日(日)の子どもたちとの合同礼拝でのお話の中でも触れましたが、主イエスが断食をされた期間は40日間であり、究極の空腹状態であったと思います。本福音書においては、マタイやルカのようにサタンによる誘惑の詳細な内容に関しては割愛されており、「…サタンから誘惑を受けられた。」(13節)との一言で集約されています。また、その間、主イエスは「野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」とありますが、殺風景の荒野において、命の危険にさらされながらも、み使いの庇護のもと、悪魔の試みに打ち勝たれたことを読み取ることが出来ます。現在、私たちも主のみ苦しみを想起す受難節の時期を過ごしていますが、悔い改めと克己の時として、イースターまでの40日間(6回の日曜を除く)を過ごして参りたいと思います。

続く1章14節以降3章の前半部分まで、主イエスによる初期のガリラヤ伝道の様子について描かれています。洗礼者ヨハネがガリラヤの領主であったヘロデに対して、不道德の罪をとがめた結果、アケラオ城の獄中へと送られ、メシアの先駆者としての働きはそこで断念されてしまいましたが、一方で主イエスは郷里ナザレから離れて、本格的な宣教活動をスタートされます。その第一声が15節のみ言葉であると言えます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と、著者は簡潔な言葉によって主イエスのメッセージを述べています。神様の計り知れないご計画の中で、新たな時代が始まろうとしていることを告知しており、主イエスは「時は満ちた」と言われ、いよいよ神様のご支配が現実のものとなると言われました。旧約の知恵の書であるコヘレトの言葉(伝道の書)の著者も、「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」(コヘレトの言葉3:1)と述べていますが、主は神様のお定めになった時が満ちて、神の国が間近に迫っていることを宣言されたのであります。

16節以降20節まで、ガリラヤの4人の漁師たちが主イエスの弟子となって従ってゆく場面が描かれています。本福音書の著者は、神の国が主イエスを中心として、どのように訪れようとしているのかを示すため、先ずはじめに、この4人の弟子たちの召命の出来事を取り上げているというのは、注目に値することと思います。メシアとしてこの世に來られた主イエスが最初、ご自分の弟子になるようにと声をかけられたのは、名もないガリラヤの漁師たちでありました。ユダヤの国の宗教的な指導者たちや有名な学者たちではなく、ガリラヤ湖で漁をしていた貧しい漁師たちの中から、ご自身の最初の弟子たちをお選びになったというのは、決して偶然の出会いではなく、そこに深い意味があるように思います。新約聖書の時代、ガリラヤ湖畔には多くの漁師たちがそこで漁業を営んでいました。一説によれば、当時、300艘以上の漁船が湖水で操業していたとも言われています。ちなみに主イエスによる5000人の給食で知られるベトサイダの町は、ガリラヤ湖の北岸に位置しており、その地名には「魚の家」との意味があります。

このベトサイダの町は本日登場する漁師であるシモン・ペトロとその兄弟であるアンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの故郷でもあります。当時の主食は肉ではなく魚であり、人々の食生活に欠かすことの出来ないその食料を確保するために、彼ら4人は漁師をしていたのであります。また、通常採れた魚は保存がきくために塩漬けにされたので、魚を塩漬けにする仕事がガリラヤ地方の主要な産業であったと言われています。

本日の場面を見ますと、主イエスがペトロとアンデレに対して「わたしについて来なさい。あなたがたを人間をすなごる漁師にしよう」(17節)と声をかけられた時、彼らはいつも通り、湖面に向かって網を投げて、漁の真っ最中であったというのが分かります。聖書には、「すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。」(18節)と書かれていますが、毎回この箇所を読む度に、ある種の違和感を覚えるのが正直な所であります。現代的に言えば、勤務時間中の職場放棄ということになる訳ですが、彼らがあらかじめ主イエスの存在について耳にしていた可能性は高いと思います。何故なら、全く初対面の人物に対して、網を放り投げてまで、つまり、職場を放棄してまで主イエスに従ってゆくには、相当の覚悟と決意に至らなければ、すぐさま行動に移すということは困難であると思います。また、ゼベダイの子ヤコブとその弟であるヨハネに関しては、兄弟で父ゼベダイの仕事を支えていた漁師でありました。ゼベダイは息子たちだけでは人手が足りず、雇人を使ってまで漁業を営んでいました。主イエスとその彼らに声をかけられた際、彼らは網の手入れをしている最中であります。ペトロとアンデレは網を打っていた訳ですから、おそらく彼らも網のほつれ等を確認し、漁に出る直前であったのだと思います。このタイミングを逃してしまったら、その日の魚の漁獲量を大きく左右する絶好のタイミングであったかも知れません。けれども、このヤコブとヨハネもまた、主イエスに従う道を選び取っているのであります。それも「父ゼベダイを…船に残して」(20節)という訳ですから、愛する家族を捨ててまで、初めて出会った主イエスに従う道を選択したというのは、普通の精神状態ではないと思います。主イエスの招きを受けた時、即座に生活の手段である網を捨て、さらには家族の絆さえ断ち切ってまで主イエスに従う道を選び取ったというのは、彼らの心の内面において、余程の衝撃が走ったからであろうと思います。

のちにペトロとともに、このヤコブとヨハネは、主イエスの12弟子の中でも三羽鳥のような側近の弟子となっていてゆきますが、やがてゼベダイの子ヤコブは初代教会における重鎮となり、使徒たちの中で最初の殉教者になったと伝えられています。紀元44年頃にヤコブがヘロデ・アグリッパ王の命により、斬首刑に処せられた時、ヤコブの勇敢な態度を間近に見た告訴者が回心へと導かれ、ヤコブとともに斬首されたとの言い伝えも残っています。一方でそのヤコブと弟のヨハネは、弟子たちの中でも生来野心が強く、その性格の激しさゆえに「ボアネルゲス」(雷の子ら)と呼ばれていました。そんな彼らが普段と変わらない何気ない日常生活の中で主イエスと出会い、主の招きの言葉を受けた時、瞬間的に彼らの心の中に電流が走るような大きな衝撃を受けたに違いありません。私自身も高校2年の時に主のみ言葉に出会い、主の招きの言葉に導かれて34年が経ちましたが、私たちと主との出会い、そして主のお導きは、人間の理性を超えた神様の深いご計画の中に隠されたミステリーと言えるのかも知れません。

昨年2月以降のコロナ禍の1年間を振り返り、各々の健康状態など、置かれている状況はそれぞれ異なっていますが、同じ主を礼拝するために、出来る限りの予防対策を講じながら、各々がリスクを覚悟して会堂での礼拝にこだわり、礼拝を守り続けてきました。この選択が最善の方法であったのか否かは分かりませんが、私たちの主に従う道の中での、一つの大きな決断であったとも思います。現在、自粛しておられ、ご家庭での礼拝や祈りを続けていらっしゃる方々も、共に礼拝することのできる日が訪れますようにと、心から願います。引き続きそれぞれの仕方で、主に従いゆく道を模索する中、道が明るく照らし出され、天からの光が差し込まれますようにと祈ります。レントの第2週目の歩みも、主が私たちといつも共におられ、主のお守りと支えのうちに祈りの日々を過ごして参りたいと思います。